[illegible]

ワ手詞

是ハ諸国一見乃僧にて候我
此程ハ都に候ひて洛陽の寺社
残りなく拝ミめぐりて候又是

サし

より南都に参らばやと思ひ候
時ハ孫生乃十月餘り眠の都を

上哥

旅立てまだき世をこめて篠目路
影花よ系も秋を下里遠く

みかさ野のあさ露涼しき山乃末
はるばる木幡乃関なけきこえて
ずか野中宿井手の里ひく袖え
こし秋そなるきうや我日の暮み
暮るゝわく　宇治たゝしき
果てりのゝくするまなつきや
気多世　更闌夜静かにして四顧

ゆゝ神の寶前に献くたる瓶も
ぞ我背なる影りとゝもに
あくり枕簾涼夜乃月影に此枝の
木末なきわく袖え神乃清心
まもまらく雉鳴くやおれすゝ芽
月よちみ花の陰遊てさめくわ
たこぬあ猶遊人我叔よるともしく

紅も白桜が宮の庭みちみちて
むらさき衣の花をまとへる藤が
枝とおもへば花を乃気色かな
ワキ詞
いかにこれなる女性に申べき
事乃候
シテ詞
こなたの事にて候か
何事にて候ぞ
ワキ
又申さば是程
志りわたる森林に重て木を植
給ふ事不審にこそ候へ
シテ
梅花
當社始て法楽乃人まゐりけるに
ワキ
さ候ははじめて此所にまいりて
候當社の謂委く御物語候へ
シテ
さらば委く語てきかせ申べし
物語
抑當社と申は神護景雲二年に
河内國平岡よりうつし奉り

本宮の後に新向なく新たまのふ
ご飛いは山本ハ象山みは深く
木うけ一もなりまーなどの岩道
ませと藤原や氏人よわて枝え
木みが本よま恵源き故かと開く
か様よ大山峻な風能ハ常社乃
旧秘ひまも人の宗論えう社し

く飛ともむ乃象乃一象も高よ
付てやまぬへきと惜ミ行ふも
なまれうど人乃情ひをききその
源りの神ともも皆法飯実能を
上声、、ーーニニーー
極置本わざときハ無此写りの
ーーニ、ーニーニーー、、
ねの新ハ三笠乃山ふも雨まて
ニニニニ、下ニーニーニーー
ぶ堂い識の月みひわえむねの

里なきまもなし　のけこそ聞ん
おりし下野吹颪ふう小春哉
我本國本迹佛の神本と思召
あさ小郡思ひ給ひつ　慈悲の
御祈ゞ治まる國ハ久しさ乃
あめかしこき我のみとゝまらず花
ひらけ奉残てゝ佛法流布難

ひさしざかりハ具楽山めして
ぬ法なり理を説給ふかハ衆生を
度を導とて大明神と現じ山よ
住給ひ所楽乃宮松ともミ笠の
山を出給ひ帰まで霊掟樹れ
末法とも盛所の夜咲て松まも
松を成れ山も開き陰ハ霊山給

浄土乃ある代とゝめやく

下詞

いつの比やへぞ事乃ハ極楽の

池とぞ隠なき此池乃ハ清浄世

し形て候へり

ワキ詞

実ゝ承及しか

池よりは清蓮多く

シテ

此蓮さへ

流出る花も色ゝ極楽の池よりぞ

なを思ふ子細のなく此池の

色ゆく清澄を読佛事をなし安

読たる

ワキ

安むるの事佛事をなさば

なし申候し極楽と回向申へ義

シテ

是ハ菖蒲女と申し人此池に

身をなげ候世をむなしくなりしなるの

さればあやめの御門の御ふに

上カル

主君もこゝにやあるらんしも髪をさし

詞
沢乃池の玉藻と見るぞ悲しきと
とゞめて哥を志るし給へば志ろし
めさるゝ程りしや　ワキ　実に此哥の
風及ぶ様は仏物語なれ
シテ　昔の天の御門乃御時よびと星乃
采女ありしが[illegible]きさみに
御寵愛もうすくなりし[illegible]

叡慮あさからざりし[illegible]雅なく
後ゝ御語[illegible]を変り給ひなから
君を恨み参らせて此池に身を投
[illegible]しく御[illegible]なわ　星吉ル　実に我も
きこしめされし御門哀と思召
シテ詞
ば猿沢の池に御幸なりて　采女を
ワキ
死骸を叡覧ありては　さしも

さゝんわうはくしのるとし
翡翠好娟娟の鬢うのはゝり
黛さんたる乃眉柔和乃姿
ひ秀の庵て池のもなはなり
ことさらうくを君も哀と思召て
玉藻もこうまくまくれ嬢なさけ
さはのゞ池乃玉藻とつくらる

の歌ーさと其にこの歌ー清き
がゝけなる縁下として君な
うら見しかりなきぞ恐だと庵の
及なき秀水の月と成さきは乃
ばむ寄るすとおもかいやまうひ秀
うきめ乃遊具とそ池なよの小
ぬは池水の底よいわにぬは

池乃ほとりのみぎはに座を
なしつゞく懐にさし清浄の
うきめ移きぬ乃色々に畢しふ
法乃聲なるく　後シテ上　すゞ錦やぬ糸
清をう浮かぶ心のみときく
もろをざりしく蓮あるも
浮ふんの精涼乃池の蓮花台に

生を受け継く再ひたまへとよ
シテ上カル　めしきや彼池の汀よあつまり拝
舞ふハ采女と沙汰す人やまし
シテ詞　さ流しなら〳〵りしへ乃
うきめり姿を歌ひなし仏果を
えしめおりし乃　シテ　本よりも
人くおなし仏性なる身なれば極も

かゝのうへ水乃底なりうお

なほきや ありし 日本國王まで

悲成仏 極なし ましてや

人々はをりてをや我女りめく

家も子孫も成男子 あわ衆女と郷

思ひ儲ひらばも 仏は補陀楽許

道乃戸よ至るわざる 南方無垢

世界を救ひも道もしやく

きかりやいかりし人よ國乃礼の

世に代へて神と君との道直よ

國家をも治めひとや後まで

君よ仕へ人は品々弥多き中に

これ衆女の御衣を着る恩乃

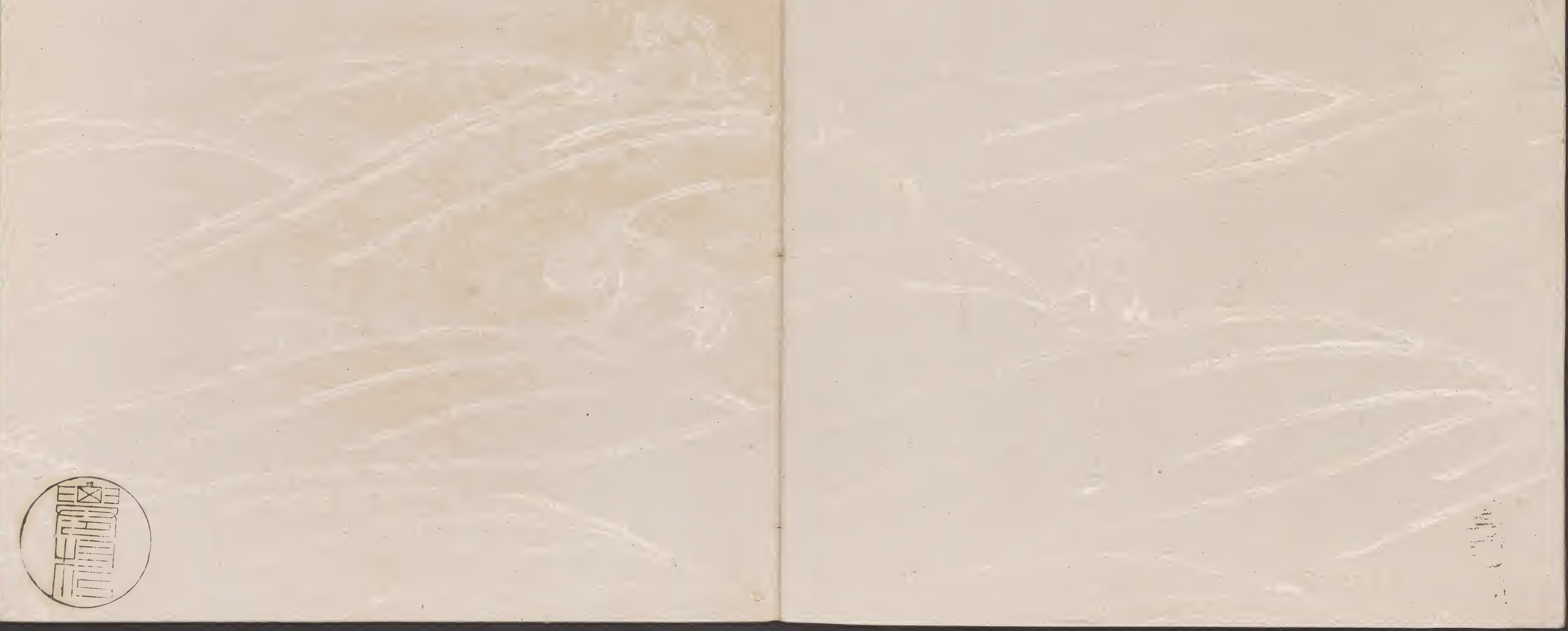
如くなる我君恩よ添へ奉仏

さ飛き世とみえりおをひなめ濵
うちにこもれる言葉かよわるゝ
あめし世もはるたくひ多かりき
りわ　葛城の大君勅に隨ひ
陸奥に遣ふもちゐは諸も郎
ざともをろそかりとて下字き
なをさたかりなとて猶しもなと

やゝもし大君乃心とけざりしに
采女成りし女はしめてうけ盃を献し
言の葉乃露の情よ心とく歓遊
もてあそふかたしさびた浅香
山の影さへみゆる山の井乃
あさくは人を思ふの心
ひゝき風もおさまりくも静よ

ぜ金銭なれどもや能は桑母の
たり小袖のさゝ音小絵る花鳥乃
どふきになより雲の袖のけも
廻や色のば遊ばは湯乃折ゝも
うすめ乃きぬのきうへてが大きゝ
人の小鳥むが桜をかさ八伝とわ
ぜふもく雅なと祥のあやを
なれ蒸哥ば曲将子を掛ハ被を
ひ体の画ーー下遊楽慣能と体
うすめばきぬうへなる雨る
まれまめや曲水乃宴ばあーー時
ばかりしけなゝ廻里ぜ廻の月
見て山寂公ぜうひゃうほな体よ
数画をさきて遊楽乃月になれ

月はなみだなし雲井の郭公
たのまつ宝の御代よ松の代はきみに
萬代とかぎりし君を天衣
なびくとも尽きぬ君は朝なん
松の葉のくさわうけして
まさきの葛もくつさなわゞの
あらたま天地をさまる国

安穏に四海波静なり　猿沢の
池の面　さゞなみは池の面よ
水清くとして浪み悠々よわけ
うつや石ばしる雲をこほす雨は涼
嬌をうつ遊楽のよはひう
天女采女のたりし袖とかはし
なるべく鏡佛楽の国なるものを

ぢくとめりきたまへやとて
おはよいわにろわまきなくの
うこりのよろわ